

子どもにとって楽しい

音楽リズムのあり方を考える(4)

原口 純子

5、踊り フォークダンス等

踊ること、ダンスは従来、子どもが本当に体を動かすことが好きで楽しむ為に踊るといふより、むしろそういった気持ちとは無関係に運動会とか、盆踊り大会、生活発表会など大人に見せることを目的として、子どもの自由な表現ではなく、大人の考えた振りを一方的に与えて覚えさせることに重点があった。子どもは教師の動きを真似ながら不安いっばいで強い緊張を強いられながら、少しも楽しめない。興味の持てない男児が耐えきれず、ふざけたり抜けたりして教師に叱られてばかりいる活動にしてしまったのではないか。より子どもの気持ちに即したリズムの経験のあり方を考える。

(1) 種類と傾向

(イ) 幼児体操 (タケノコ体操、ロボット体操、ハトポーズ体操)

(ロ) フォークダンス (キンダーポルカ、あくしゅでこんにちは)

(ハ) 盆踊り (ドラエモン音頭、くまちゃん音頭、等)

(ニ) リズムダンス (クリーミーママミ、ペガサス)

事例14 ポンポンを持って踊る(曲「ベイビィロックンロール、チャチャチャ」) 年長 6月

ポンポンを出しておく女児5人が、ポンポンを持ってテープの音楽に合わせて自由に体を動かす。動きを思いつく子がリーダーになり、他の子は友だちの動きを意



識して同じように動こうとする。ポンポンを持つことにより、動きが明確になり楽しんで表現する。

事例15 年少男児が自主的に踊りを楽しむ(曲「ペガサス」年少 6月)

部屋の前の廊下にテープレコーダーを持ってきて、男児6人が青のポンポンを持ってペガサスをかけて自分たちで踊っている。「ヤーツ!!」のところが気にいって何度もかけて踊っている。

事例16 年長児が新しいダンスを覚える(曲ラッキークーゼン、ジャンケンポン) 年長 9月

朝、登園時に曲をかけポンポンを出して興味を持つよう設定しておく。登園した子どもから気づき主に女児が集まってくる。思い思いに自由に振って遊ぶ。見ている子に教師が「楽しそうだね。入ってみようか」と声をかける。おもしろい振りや楽しい振りをつけている子、その子を真似る子などがある。教師も参加して踊り方や、ポンポンの振りを工夫している子などを認め雰囲気をもり上げる。教師も一緒に踊ることにより多くの子どもが

参加して踊り始めた。

〈考察〉

(ア) テープレコーダーの改良により子ども自身が自由に曲を選んで操作できるようになり、遊戯は大人の管理する教師主導型の一斉活動から解放され、子どもの自由な自主的な活動となった。このことにより大人がコントロールする、見せるための踊り、型どおりそろって踊る、教え込む踊りから、子どもが、リズムに乗って自分で楽しむ為の踊りへと変わっていったとも言える。

また、ままごとやパーティーごっこなどの子どもが発的な遊びの中に組み込まれるようになった。

(イ) 音楽はリズムが明解で踊りやすい曲が生まれ、同じ曲を何度でもかけて踊る。(例「クリーミーマミー」「ペガサス」「キャンディーワルツ」等)

(ウ) オークストラだけの曲よりは、言葉、日本語の入った曲の方が踊りやすい。

(エ) 年少児には友だちと組んで踊るものよりは、「アブラハムの子」や「バードダンス」に見られる一人一人が

踊るスタイルのものの方が、その子なりのリズムとやり方で踊れるため楽しめる。

(カ) パートナーチェンジをするフォークダンスは年長の12月でもかなりむつかしくよく理解のできない子が出てくる。

(ク) ポンポンやりボンテープ等の手具は踊りをはなやかにし、動きを明解にするため、ある方がより楽しめる。

これらの手具によって踊りたいという意欲をかき立てられる。又これらの手具は同時に参加メンバーを限定することになり、持たないと仲間に入れてもらえないことがあり、数をととのえる必要がある。

(キ) 盆おどりは夏まつりを7月にするため季節が決められ、踊り方はやさしいとはいえ一定のパターンを与えることになり、4月に入った年少の子どもたちには必ずしも適当な教材とはいえない。

(ク) 性差…女兒は年少、年長とも概して踊りを好み、曲も「クリミーママミー」「キャンディーワルツ」などかわいらしい感じのものを好むが、男児は「ペガサス」

「森のくまさん」など男っぽい曲、力強い踊りを好む。

年令…女兒においては年令によるちがいはないが、男児は年少のころは比較的こだわらず喜んで踊るが、年長になると、てれくささや気はずかしさを感じるようになり、自分たちでレコードをかけて踊ることは少なく、さそわれても入ろうとしない。

(ク) 踊り方…年長の場合は、踊りが好きで表現のうまい子の発案を他の子どもが真似てとり入れる。年少の場合は、手や足を同じように動かすばかりで振りつけまでは経験が少なくできないため、教師がいろいろな表現方法を教えて、いっしょに踊ることにより、楽しく踊ることができ。初期の段階では同じ曲でバラバラに踊ったり、曲をかける度に違った踊り方をしているが、次第に一定して来て、誰が参加してもほぼ一定のパターンで踊るようになる。

(ク) 教え方は、全員集めて一斉に教える場合もあるが、好きな子どもだけが集まって、その子どもたちに教えることによって、クラスのみんなに見せて、全体におろし

たり、一人の子が覚えるとその子どもを中心にクラス中に踊りが広がっていく場合もある。

6、総合活動としての野外劇 白雪姫より「森の詩」全園児

今年度初めて運動会に行った野外劇はまさに音楽リズムの総合活動であり、結果として幼児の音楽リズム、身体表現活動に多くの示唆を与えた。

(1) 野外劇をする理由

運動会の会場を園庭から桜南運動公園の芝生広場に移したのをきっかけに従来の一つの曲を教師が選んで、教師の決めた振りを一方的に教えこむやり方を脱却してストーリー性のあるものを、子ども自身が理解して、楽しみ、役割を演ずる音楽劇スタイルの方が個々に応じた表現活動になるのではないかという観点から野外劇をすることにした。

(2) テーマの設定理由

子どもの好むもの、興味のあるものとして、女兒はお

姫様、お花、男児は恐竜やおぼけ、魔法使い、ロボット、小人などがあげられた。これらの役割素材から子どもが親しめるお話を帰納して、白雪姫のストーリーが浮かび上がってきた。ただし白雪姫の物語そのものではないため、イメージだけを借り、白雪姫より「森の詩」とした。

(3) 構成、選曲、役割（次頁表参照）

(4) 準備及び指導の過程

9月15日ごろより構成を決め、約20分間のテープの構成をする。年長児はクラスを解体して自分のなりたい役を選ばせ人数の調整をとった。パートごとに曲に合わせて動きの意味を考えさせながら（例えば、魔法使いが白雪姫に魔法をかける場面とか、白雪姫が野原でたのしく踊っている場面等）その気持ちや動きを理解して、曲に合わせて、子どもの表現力や、教師側の振りをとりいれながら踊ってみる。年少児にはできるだけわかりやすく、動きやすい曲を選び、カスタネットのリズムを取りながら歩いたり、広がったり、縮んだりという単純なも

場	面	キャストイング	レコード	コスチューム・小道具
(1)	静かな森の朝	(全員で聴く)	パールギユント 朝の曲	
(2)	花の精の踊り	年長女兒 1/2	天使のメヌエツト	赤いスカート・赤い花の冠・手に赤い花
(3)	白雪姫の踊り	〃	キャンディーワルツ	白いスカート・白い花の冠・手に白い花
(4)	小人の入場	年少(カスタ使用)	ハイホー(ディズニー)	三角帽子・手にカスタ・手の花
(5)	小人の踊り	年少全	大きく小さく	〃 〃 〃
(6)	魔法使いの踊り	年長男児 1/2	なまげもの (ひらけボンキッキ)	ふろしきマント・手に毒りんごの棒
(7)	王子の入場 魔法使いとの戦い 王子の組体操	〃 〃 〃	ワグナー タンホイザー ワグナー タンホイザー	金色冠・剣
(8)	お祝いの踊り	年長男女全	ホ・ホ・ホ、フォークダンス	
(9)	全員のフィナーレ	年少、年長全	小さな世界	

のとした、簡単なスカートやマント、花の冠や剣、毒り
 んご、三角帽子といったコスチュームや小道具を持たせ
 ることにより、非常にその役になり切る気持ちを持たせ
 切るが、年長の男児には「白雪姫」は気持ちの上で乗り
 にくく、魔法使い、王子共にまとめるのに手がかかっ
 ることができた。女兒の花の精や白雪姫は興味もあり張

た。戦いの場面は大好きで本気でやるが、王子の組体操等、三人で一組になる点、静的状態の多い活動はややむつかしいものと思われた。手をつないだ円型の形成というのも比較的困難なことで八名程度までであれば苦勞はないが百名近くで一つの円は切れたりゆがんたりして大人数ではむつかしい活動であることがわかる。

(5) 野外劇を通して学んだこと
(ア) 踊りを通して音楽を鑑賞する

音楽の鑑賞は、音楽の領域の中でも比較的幼児にはむつかしい部門である。美しいクラシック音楽も、じっとして耳をかたむけることは幼児には退屈で苦痛である。

野外劇をやってみて、音楽鑑賞は踊りを通して、気持ちで表現しながら聞くのがふさわしい形態であることに気づく。フルートやオーケストラの美しい音楽のつて楽しく踊ることができた。振り付けも教師が一方的に与えることなく曲を聞きながら、「このところどんな風にしようか」と子どもに問いかけながら、いろいろの表現を引き出し、教師がまとめていった。このため子ども

たちが自分たちで作った気持ちになりよくおぼえた。美しい曲を子どもに聞かせボンボンやリボンを使わせて自由に表現させることによりたのしく、体を通して音楽鑑賞をすることができる。音楽鑑賞を大人がコンサートで聞くのと同じイメージでとらえることなく、もっと自由に、気楽に音といっしょに体を動かすことにより鑑賞するということを考えても良いのではないか。

音楽の鑑賞はこの他食事の時間にかけている音楽も教師が期待しているよりずっとよく聞いておどろかされることがある。テレビのCMもクラシックの曲が多くよく知っている。音楽の鑑賞はバックグラウンドミュージックなども含めて広くとらえて良いものと思われる。

(イ) 踊りを通して歌をおぼえる

白雪姫の踊り、小人の踊り、魔法使いの踊りは共に歌詞のあるレコードである。小人の踊りの「大きく小さく」は言葉通りに体を動かすため踊りやすくすぐおぼえた。白雪姫の踊りの曲、キャンディーワルツや魔法使いの踊りの曲、なまけものの歌も何度か踊っているうちに

歌をおぼえてしまい、日常生活の中で他の役の子どもも口ずさんで歌っていた。オーケストラの曲だけのものよりは歌詞のある曲の方が子どもには踊りやすい。

以上のことから歌の指導の仕方にしても歌詞を黒板に書いて直立して歌だけを何度も復唱させながら教えるよりは、体を動かし振りや手あそびなどの動きを通して教える方が子どもには楽しく、かんとんにおぼえられるのではないかと思われる。

(ウ)動きながら楽器を使う

マーチングバンドなどに見られるとおり、動いたり、歩いたりしながら楽器を使うことはめずらしいことではない。年少の小人は入場場面の「ハイホー」の曲および「大きく小さく」の踊りにカスタネットを用いた。歩きながら歩調に合わせて手を打つことは初めはできない子どもも何人かいたが、なれてくるとみんなできるようになった。手を高く上げて打つ、しゃがんで打つなど変化を加えた。一般に打楽器は屋内ではひどい騒音になりがちであるが戸外であるため分散してほど良い音量となっ

た。小人の表現として適切なものとなった。四歳の幼児が楽器を手にして鳴らさずにじっとしていることは大へん困難である。むしろ楽隊ごっこなどの型で動きながら鳴らす方がたのしめられると思われる。

(6) 運動会後の子どもの姿 四歳の場合

運動会の終了後年長児の踊ったダンスの曲をクラスで流すと、女兒が中心にカセットテープの周りに集まり歌を口ずさんだり「あっ白雪姫だ!!」と親しみを示す。聞きなれた曲のところにくるとみんなてテープに合わせて歌をうたう。(キャンディーワルツ、なまげものの歌、ハイホー)スカートや冠、剣など劇に使った衣装や小道具を出してやると、ほとんどの女兒が身につけ、年長児のダンスのまねをして踊りだす。歌詞のない花の精の踊りよりも歌詞のある白雪姫の踊りの方が絶対的に人気があり、衣装のスカートもとりに合いになる。教師が踊りを教えたわけでもないのに、年長児のダンスをよく見ていて一応型になっている。にこにこした表情でたのしそうに踊っている。教師が小さなマイクを用いて劇のナレー

ションや進行を入れてやると、一層活気づいて男児も魔法使いになって参加してくる。なまけものの歌は人気があり、踊りながら口ずさんでいる。自分たちのやった小人の役には人気がなく、なり手が無い。いずれも年長のやった役をとりたがる。

衣装の効果は大きく、衣装をつけることによりその役になり切ることができ、表現あそびが楽しく効果的にこなわれた。

年長児の模倣をくり返ししながら、かつそのままそっくりではなく部分的に自分たちのやりたいように変化をつけて、リボンを用いたり、ポンポンを用いたり、踊り方を変えたりする部分も見られる。いろいろな役を試みて踊り、運動会終了後、約一か月にわたって自分たちでテープをかけては踊る「白雪姫ごっこ」がつづいた。運動会を通して何度も同じ曲を聞いたことから歌が耳になじみ、トイレに行きながら、他のブロックの遊びをしながら、いたるところで口ずさんでいた。クラシックの曲も何度かやっている自分のものとして踊れるが、一般

には年少の場合歌詞のある曲の方が踊りやすい。

(7) まとめ

野外劇はグラウンドいっぱいステージとした音楽リズムの総合活動である。これらの総合活動を通して幼児にとって音楽リズムというのはまさに身体を動かすことと一体であることがわかる。鑑賞にしても、歌うこと、楽器を使うこと、踊りそのもの全て体を動かすことによって快適に経験されている。リズムにのって体を動かすことが子どもにとって理屈をこえて快である。この野外劇での経験は、今日までの音楽リズム教育のあり方全てについて反省させ、子どもにとって楽しい歌や楽器の指導、鑑賞のあり方について検討するきっかけともなった。

— つづく —

(つくば市立桜南幼稚園)